

A年特定17 マタイ16章21―27節

〔直訳〕

21 この時から 始めた イエスは 示すことを 彼の弟子たちに 次のことを  
必ずある 彼が エルサレムへと 出て行くことが  
そして 非常に 苦しむことが 長老たちと祭司長たちと律法学者たちから  
そして 殺されることが  
そして 三番目の 日に 起こされることが。

22 そして 脇へ連れて行き 彼を

ペトロは 始めた いさめることを 彼を 言いつつ、  
「慈しみが あなたに、 主よ。

決して ない だろう あなたに これが。」

23 だが彼は 振り向いて 言った ペトロに、

「去りなさい 私の後ろに、 サタンよ。  
つまずきで あなたはある 私の、  
というのは ない あなたは思っている 神に属することを  
そうではなく 人間たちに属することを。」

24 その時 イエスは 言った 彼の弟子たちに、

「もし ある人が 望む 私の後ろに 来ることを、  
否定しなさい 自身を

そして 取りなさい 彼の十字架を

そして 従いなさい 私に。

25 なぜなら誰であれ 望むなら そのいのちを救うことを  
失うだろう それを。

だが誰であれ 失うなら そのいのちを 私のために  
見いだすだろう それを。

26 なぜなら何の 益を受けるだろう 人間は  
たとえ 世界 全体を 彼は得る

だがそのいのちを 彼は喪失するなら。

それとも 何を 与えるだろう 人間は そのいのちの代価として。  
27 なぜならしようとしている 人の子は

来ることを 彼の父の栄光において 彼の天使たちと共に、  
そして その時 彼は返すだろう 各人に 彼の行いに従って。

〔新共同訳〕

21 このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになつてゐる、と弟子たちに打ち明け始められた。22 すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあつてはなりません。」23 イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思つている。」24 それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負つて、わたしに従いなさい。25 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。26 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失つたら、何の得があるうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。27 人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。

①構成

①a 第一段落 (21節)

ペトロが弟子を代表して、「あなたはメシア、生ける神の子」と告白したことを受け、イエスは「受難と復活」を予告する(21節)。これは最初の「受難と復活の予告」であるが、二回目と三回目は次のように述べられている。

人の子は人々の手に引き渡されようとしている。そして殺されるが、三日目に復活する(一七22―23)。

今、わたしたちはエルサレムへ上つて行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架に付けるためである。そして、人の子は三日目に復活する(二〇18―19)。

最初の「受難と復活の予告」では、イエスを苦しめる相手は「長老、祭司長、律法学者たち」であるが、二回目では「人々」に、さらに三回目では「異邦人」に移っている。イエスを拒絶する動きは、ユダヤ人指導者層から始まるが、さらに一般の人々にも伝播し、異邦人もそれに加担する。

①b 第二段落 (22―23節)

ここでは、イエスをいさめたペトロと、それに対するイエスの応答が述べられる。メシアが苦しめられるはずがないと考えるペトロは、イエスを脇へ連れて行き、いさめる。十字架に向かつて歩むイエスの前に立ちただかるかぎり、ペトロは「神のことを思わず、人間のことを思つている」サタンである。イエスは「去りなさい、私の後ろに、サタンよ」と叱る。ペトロはイエスの前ではなく、イエスの後ろに従うべきである。

①c 第三段落 (24―27節)

最後にすべての弟子に向けて語るイエスの戒めで終わつてゐる。24節で弟子の取るべき態度を述べて、「自分を否定し(捨て)、十字架を取り、イエスに従う」とした後、「なぜなら」で始まる25

—26節が、その根拠を教える。生きるべきいのちは、イエスに従って捨てるという道を歩むときに与えられる。このいのちは、死をも乗り越えて続くいのちである（27節）。

## ②必ず起こること（21節）

① 21節の「この時から 始めた イエスは」と同じ言い回しは、マタイ4章17節に見ることができ

きる。  
この時から、始めた イエスは 宣べ伝えることを、そして 言うことを、  
「悔い改めなさい。なぜなら近づいた 天の国は」。

マタイ4章17節では、イエスは「天の国は近づいたから、悔い改めなさい」と告げ始める。人々が悔い改めるよりも前に、天の国が近づいている。そのことに気づいて天の国に身を合わせて生きることを、神に向き合って生きること（悔い改め）を宣べ伝え始める。それに対して、ここでは「苦しみを受け、殺され、復活する」と弟子に打ち明け始める。イエスの活動はこの時から新たな段階に入る。

② 「長老たちと祭司長たちと律法学者たち」とあるが、最初の名詞「長老たち」だけに冠詞がつけられている。このことは、長老と祭司長と律法学者とが三つの別の存在ではなく、一つのグループと見なされていることのしるしである。日頃は利害の対立から衝突を起こすことがあっても、イエスの殺害ということに関しては、彼らは一つになっている。

③ イエスは「示すことを始めた」。「示す」という語はマタイ福音書では、公にはなく、内輪に何かを示すときに使われる（四8、八4）。内輪で、弟子にのみ受難を予告したのは、彼らは十字架の道を共に歩むべき仲間だからである。

## ③サタン、引き下され（22―23節）

④ メシアの受難と死を認めることができないペトロは、イエスを脇へ連れて行っていさめる。すると、イエスは振り向いてペトロを戒めるが、この場面をマルコの並行箇所（八33）と比較すると、無視できない違いがあるのに気づく。マルコは

イエスは振り返って、そして、見て、彼の弟子たちを、叱った。ペトロを、そして、言う

と描いている。まず、マルコの「ペトロを叱った」をマタイは削除している。さらに、「彼の弟子たちを見て」も削除している。マルコの表現は、ペトロが弟子のあるべき位置から離れたことを暗示している。弟子はイエスの後を従うべき存在であるが、ペトロはイエスを脇へ連れて行っていさめたことによって、弟子の位置から逸脱している。マタイは、マルコからこの二つの表現を削除することによって、ペトロに対するイエスの態度の厳しさを緩和しようとしている。

⑤ しかし、マタイはマルコの「振り返って」を「振り向いて」に変え、残している（マタイの「振り向く」はマルコの「振り返る」から接頭辞を取った動詞であるから、同根の動詞である）。この「振り向いて」は、22節で「ペトロはイエスを脇へ連れて行き、いさめ始めた」とあることから考えると、奇妙な感じがする。ペトロが脇へ連れて行った時点で二人は向き合っていると考えるのが自然だからである。そうであれば、この「振り向く（振り返る）」は文字通りに「向きを変える」の意味で使われているのではなく、イエスと弟子の理想的な位置関係を暗示しているの

かもしれない。つまり、弟子はイエスの後ろに立つべき存在であり、この理想の位置関係を示すために「振り向いて」と述べているということである。

◎22節の「いさめる」は「非難する」の意味でも使う。イエスと生活を共にする弟子たちも、イエスが誰であるかを完全には理解できずにいた。ペトロはイエスが進む道に立ちほだかるうとする。ペトロはイエスに「慈しみがあなたに」と言うが、これは「神があなたに寛大であるように」を意味し、そこから「そのような事が起こらないように」とか、「とんでもないことです」の意味で使われる。ペトロはイエスについて「あなたはメシア、生ける神の子です」と告白しているが、イエスが「苦しんで、殺される」メシアであることは納得できなかった。むしろ、神の慈しみがメシアであるイエスを守るはずだと考え、「(神の)慈しみがあなたに」といさめる。

④いさめるペトロに対して、イエスは「私の後ろに去りなさい、サタンよ」と言う。この「去りなさい、サタンよ」は、イエスに国々の栄光を示して誘惑した悪魔にイエスが語った言葉である。イエスが十字架へと歩むのを押し止めようとした。ペトロは「サタン」であり、「去りなさい」とたしなめられる。しかし、ペトロに対しては、悪魔のときとは違って、「私の後ろに」が加えられている。イエスは漁師のペトロと最初に出会ったとき、「わたしについて来なさい」と呼びかけているが、これを直訳すれば、「来なさい、私の後ろに」となる(四19)。弟子であるペトロはサタンのようにイエスが進む道に立ちほだかるうに、イエスの後ろに回って従うべきである。

◎「あなたは私のつまずきである」を新共同訳は「あなたはわたしの邪魔をする者」と訳す。新共同訳が「邪魔をする者」と訳した言葉は「つまずき(スカンダロン)」である。この語はもともと「畏」を意味し、「罪を犯させる原因や誘惑」とか、「教えから離れさせたり、信仰を失わせた」りする誘惑」を表す。十字架にのぼるメシアを理解できずに、それは「とんでもないことだ」と述べた。ペトロは、イエスにとって「サタンの誘惑」なのである。

①23節の「思う」はフロネオである。この語は「考える、思う」を意味するが、知性の働きだけでなく、意志の動きをも表し、「考えた結果、態度を決める」といった意味合いをもっている。ここでは単純に「何かを考える」の意味ではなく、「心をそこに向ける」といった強い意味で使われている。神のことを「思わず」、人間のことを思っている。ペトロをイエスが叱る。神に従うか、人間に従うかによって、その人のありようは全く変わる。ペトロはメシアの受難の必然性を理解せず、イエスの前に立ちふさがることによって、人間に従う道を選んでしまっている。

#### ④自分を捨てるのは背負うため(24-27節)

②24節に「イエスは言った 彼の弟子たちに」とあるように、イエスはすべての弟子に語りかける。「私の後ろに来ることを望む」で用いられている「来る」という動詞は、4章19節とは別の動詞だが、意味は同じである。イエスの弟子の定位置は、「私の後ろに」にある。

③イエスはまず「自身を否定する」ことを求める。動詞「否定する(アパルネオマイ)」は、イエスがペトロに対して、「鶏の鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と予告した言葉にも使われている(二六34・75)。イエスを「知らないと言う」のではなく、自分を「知らないと言う」者、つまりイエスの後を従うために、自分を完全になくす者が弟子なのである。

◎さらにイエスは「彼の十字架を取りなさい」と命じる。ここでの十字架は「キリストが開いた道」を象徴的に表している。自分を「否定して」捨てるのは、十字架を「取る」ためであり、イエスに「従って」歩むためである。

④ 24節で「自分を否定し（捨て）、十字架を取り、イエスに従う」ことが弟子の取るべき態度であると教えた後、25―26節がその根拠を教える。失ってもよいいのちと、見いださねばならない「いのち」がある。ただし、「私のために」いのちを失うとき、それを見いだすことができる。⑤「益を受ける」は動詞オーフェレオーの受動形である。オーフェレオーは名詞オフエロス（利益・得）から派生した動詞で、「役に立つ・益になる」の意味である。受動形では「益を受ける」の意味になる。「私のために」失って、見いだすことのできた新しい「いのち」は、全世界よりも重い価値を持っている。パウロはそれを「わたしは……ヘブライ人の中のヘブライ人です。……熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです」（フィリ3:5―7）と表現している。

### ⑤ イエスの後ろを、いのちへの道を歩く

① 第一段落では、イエスが歩むことになっている道が描き出される。「必ずある」と直訳した動詞は、ある出来事が神の意思であるがゆえに「起こることになっている」を意味する。イエスはエルサレムへと行かなければならない。そして長老、祭司長、律法学者から苦しめられ、しかも殺されねばならない。さらに、苦しみ、殺されるだけでなく、三日目に復活することも神の意思である。しかし、ユダヤ人が待ち望んでいたメシアは、ユダヤ人の間に分裂を引き起こしたり、むなしく殺されるような無力な敗北者ではなかった。「あなたはメシア、生ける神の子です」と告白していたペトロも、ユダヤ人の常識や「人間の思い」から自由ではなかった。

② 第一段落（21節）で受難が予告され、第三段落（24―27節）で「十字架を背負いなさい」という勧めが語られ、間には含まれた第二段落（22―23節）では、十字架を理解できなかったペトロに、「私の後ろに」従うようにと戒めが与えられる。イエスがメシアであることをペトロが告白したとき、イエスは「あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」と応じ、ペトロの告白の正しさを認め、彼を祝福している（一六17）。しかし、「人間の思い」から自由になり切れずにいたペトロが、受難を予告したイエスを脇へ連れて行き、「とんでもないことです。そんなことがあつてはなりません」といさめると、「あなたはわたしの邪魔をする者」とイエスは叱る。

③ 「邪魔をする者」は文字通りには「つまずき」である。ペトロが天の父のものとなって発言するときには、「幸いだ」と祝福され、人間の思いに囚われたときには、「つまずき」とされ、「サタン、引き下がれ（私の後ろに去りなさい）」と叱られる。人間的な栄光を求めるとき、人はサタンの誘惑に陥っている。ペトロは弟子の定位置である「イエスの後ろ」に立ち、十字架に向かって、前を行くイエスに従うべきである。

④ 24節は三つの命令文を使って、弟子の取るべき態度を明らかにしている。自分（人間の思い）を捨てるのは、十字架を背負うためであり、イエスに従うためである。これこそ「いのち」への道であり、この「いのち」は全世界よりも価値がある。しかも、この「いのち」の確かさは終わりの日に再臨するイエスによって確認される。

⑤ 人間のありようをすっかり決定する「思い」がある。それは「神のことを思う」か、「人間のことを思う」か、二者択一の形で人間の前に置かれている。神のことを思う者は、自分を捨て十字架を背負うが、それこそが「いのち」への道なのである。